

「会いたかった」

—修正稿—

2026/8/19

雨森 れに

〈人物表〉

城谷圭史しろたに けいし

(35)

暴力団構成員

西川奏美にしかわ かなみ

(32)

圭史の元恋人

西川涼真にしかわ りようま

(享年22)

奏美の弟

1. (回想)・公園(夜)

1年前。広い公園内の雑木林。

西川奏美(32)、走りながら電話をしている。

奏美 「涼真、どこ！？ どこなの!?!」

入れ墨の入った金髪の男、西川涼真(22)が血まみれで倒れている。

奏美 「涼真!」

頬を何度も叩くが、反応はない。

奏美 「嫌。なんでっ」

涼真を強く揺する。

涼真の手からスマホが滑り落ちる。

奏美と通話中のまま。

奏美、通話を切り、履歴を見る。

30分前に城谷圭史との履歴。

リダイヤルする。

2. (回想)・車・車内(夜)

公園近くに停めている車。

煙草を吸う城谷圭史(35)、電話を取る。

圭史「まだ生きてんのか。しぶといな」

奏美の声「圭史」

圭史「奏美」

3. (回想)・公園(夜)

通話が切られる。

奏美、かけ直す。

着信拒否のアナウンス。

自分のスマホでかけ直す。

こちらも着信拒否。

奏美、叫ぶ。

(回想終了)

4. 電車・車内(夕)

海のさざめき。

窓の外には海が広がっている。

奏美、窓の外を見ている。全身黒づくめ。サングラ
スをかけている。

左手はコートのポケットにつっこんでいる。何か握
っている様子。

5. 廃墟・前（夕）

郊外にある研究所跡地。

奏美、立ち止まる。

電話をかける。

奏美 「着いた」

6. 廃墟・廊下（夕）

窓から西日が差すだけの薄暗い廊下。

ハイヒールの音が響く。

圭史、顔をあげる。眼鏡でスーツ姿。

圭史 「それ（自分の眼鏡を叩いて）、いらなくね」

奏美 「アンタに見せる顔なんてない」

圭史 「どういう意味だよ」

奏美、圭史の頬に触れ、眼鏡を押し上げる。

奏美 「自分を殺す相手の顔なんか見たいわけ？」

左手は変わらずポケットにある。

圭史、ポケットのふくらみを見て、微笑む。

圭史 「ちゃんと殺すつもりで来てくれたんだ」

奏美 「アンタが『殺してくれ』って言ったんでしょ」

圭史 「そうだよ。弟の仇だろ？」

圭史、頬を擦りつける。

圭史 「会いたかった」

奏美、指先を残して、ゆっくり離れる。

圭史、歩き出す。

奏美 「どこ行くの」

圭史 「廊下じゃ雰囲気ないからな」

奏美、圭史の後に続く。

机と椅子、家具だけ置き去りにされた広い部屋。大きな窓から海と港町が見える。

圭史 「あの海、覚えてるか？」

奏美 「忘れるわけないでしょ」

圭史 「だから、ここにいた」

圭史、椅子に座る。

スーツのボタンを外し、ネクタイにも手をかける。

奏美 「ちよ、なんで脱ごうとしてんのよ」

圭史 「服、邪魔だろ。脱いだほうが殺しやすい」

奏美 「バカ。まだだから」

奏美、緩んだネクタイを直す。

圭史、奏美を愛しそうに見つめる。

奏美 「なんで、涼真を殺したの」

圭史 「仕事だからな」

奏美、圭史を突き飛ばす。

圭史 「おっと」

奏美 「あの子はアンタに憧れてたのに」

圭史、へらっと笑う。

奏美 「涼真を返してよ」

圭史 「それができたらよかったんだけどな」

奏美 「じゃあ、仕事、やめてよ。全部やり直そうよ」

圭史 「それも、無理だな」

圭史、奏美を見つめて、

圭史 「俺が生きてたら、ずっと苦しいだろ」

奏美、顔を伏せる。

圭史 「俺が叶えてやれるのは、これしかない」

圭史、深く座り直す。

手足を大きく広げ、殺しやすいように体を開く。

しかし、奏美は動かない。

圭史 「悪い。脱いでなかったな」

奏美、首を振る。

圭史、ため息。

圭史 「涼真は、オヤジを裏切ったんだ」

奏美 「だからって殺さなくてもいいじゃん。アンタだってかわいがってたのに」

圭史 「あのなあ。盃を交わすって意味、わかんדר？」

奏美 「それでもっ」

圭史 「じゃあ、俺が殺したくて殺したって？ ふぎけんなよ」

圭史、床を踏みつける。

早口で、

圭史 「惚れた女の弟だぞ。合わせる顔がねえよ。だから一年、連絡できなかった。でも、ずっと会いたかった」

奏美、サングラスを外す。

奏美 「圭史」

圭史、目を見開く。

すぐにくしゃりと笑って、

圭史 「やっぱ、奏美はいい女だな」

奏美 「私も、ずっと許せなかった。憎かった。でも、それ以上に会いたかった」

圭史 「奏美、もう終わりにしよう」

ふたり、見つめ合う。

奏美、首を振る。

奏美 「そんな簡単に終わらせない」
ポケットに手を入れる。

左手が何かを握り込む。

圭史 「いいよ。気が済むまで、やれよ」

奏美 「圭史が決めていいことじゃない。涼真は返ってこないんだから」

奏美、圭史に近づいていく。

圭史、背もたれにもたれかかり、

圭史 「そうだな」

目を閉じる。

奏美、スタンガンを取り出す。

圭史に強い衝撃。

圭史、脱力。

× × ×

奏美、圭史の椅子に背を預け、床に座っている。手

にはスタンガン。

スタンガンを捨て、スマホを取り出す。

ダイヤルパッドで『110』を押す。

8.

廃墟・所長室（夜）

圭史、目覚める。

部屋には圭史のみ。

何が起こったのかわからない様子。
体を探る。

胸ポケットから写真を取り出す。

海辺で奏美と涼真が笑っている。

サイレンの音。

圭史、窓へ。

落ちていたスタンガンが足に当たる。

圭史 「最初から殺す気なんかなかった、てことね」

額に手を当てる。

圭史、奏美に電話をかける。

廃墟に近づいてくるパトランプ。

9.

ホテル・客室（夜）

ビジネスホテル。

白いバスローブ姿の奏美が窓辺に座っている。

奏美、廃墟へ向かうパトランプを目で追っている。

手にはスマホ。

着信音。

しかし、出ない。

スマホをテーブルへ置く。

テーブルには一枚の写真。海辺で圭史と涼真が笑っ

ている。隅には奏美の指が写り込んでいる。

奏美、写真を裏返す。

ベッドへもぐりこむ。

白い寝具に包まれる。

着信音が止まる。

奏美、ぎゅっと目を閉じる。

海のちやめき。

(おわり)